

E. トラー

「どっこい、おいらは生きている！」試論

古 賀 保 夫

エルンスト・トラー Ernst Toller (1893—1939) の「どっこい、おいらは生きている！」Hoppla, wir leben! はトラーが5年の刑を終え出獄したあとの作品である。トラーは1919年2月、25歳にして独立社会民主党バイエルン支部長、バイエルン労農兵評議会代表、ついで北部軍司令官として革命軍のダッハウ赤軍部隊の指揮をとったが、革命は敗北、同年6月4日逮捕され大逆罪により5年の要塞禁固刑を言い渡された。収監中作品Masse・Mensch「大衆・人間」,「機械破壊者」Maschinenstürmer,「ヒンケマン」Hinkemann がベルリン、ライプツィヒで上演され、さらに「ヒンケマン」が1924年ドレスデンで上演されるころからトラーの名声は拡がった。ために特赦の恩典に浴したが本人は「同志は苦しんでいる。自分ひとりが釈放されるのは良心にそむく」として、これを拒否、結局1924年7月15日釈放となり、同時にバイエルンから追放されていた。特赦拒否は「良心と純粋さ」を胸一杯に満たしていたトラーの心根を証明している。この心はその純粋さ故に、政治的正義を崇高なものとして取り組み、現実の政治悪を受け入れ切れなかったことの心情でもあった。それは瘦我慢に身を置くことでもあったし、個人と社会の矛盾を突き破るための力、荒涼たる状況を変革する実践的知覚を欠くことにもなった。

いま出獄後の第一作のドラマの筋を追いながらトラーの人生、その時代背景、その土壌から生まれ、政治的格闘の中に生きた、ひとりの人間の劇的な歩みを追ってみることにする。

ドラマは1919年時代を想定して成り立っている。1919年といえばドイツ

労働運動は混迷の中にあり、2月にはアイスナーが狂信的な国家主義者である学生アルコ伯の手にかかって暗殺された。革命評議会所属のトラーは、そのころ政治的指導者として現われていたとはいえなかった。もちろんアイスナー暗殺後、労農共同戦線の「レーテ」の怒りは激しかったが、指導者に欠けており、その中の著名人としてのトラーも工業労働者農民大衆の代表には不似合いだった。「ミュンヘンの芸術的インテリ層の小さな騒がしいサークル代表」(イーヴリン・アンダーソン、大木訳「ハンマーか鉄床か」東邦出版110頁)にすぎなかった。彼らのミュンヘン・レーテ共和国は宣言一週間で潰えた。ついで共産党が自からのレーテ共和国を宣言したが、これも二週間後に崩壊、そこでE・トラーがミュンヘン第三次レーテ政府の指導者になった。ところがそれも政府軍のミュンヘン占領によって終焉を告げた。この間、100~200名に上る革命軍の死があった。この混迷さの中にトラーは青春の身を置いていたのである。しかも、そのころトラーが感じたものは始め国民から孤立していたドイツ軍隊が1920年には早くもカップに同調し、23年にはヒトラーに鞍がえするという現実であった。そのとき早くもトラーは「これはヒトラーへの道」と察する感覚があった。トラーの現実感覚そしてヒトラー観はその虚構性とドイツの存続を危くする危険人物の本性を見抜いており正鵠を得ていたということは注目してよいだろう。

Das Deutsche an Goethe, an Hölderlin, an Büchner (um nur ein paar aus der Schar der Großen zu nennen), was hat es gemeinsam mit dem Deutschen an Ruge etwa, an Theoder Fritsch, an Adolf Hitler? Toller, der die Entwicklung der nationalsozialistischen Partei genau verfolgte, wendet sich hier besonders gegen die Hakenkreuz und Antisemiten [...] Der Wille zum Direktor ist der Wille zur Selbstentmannung, zur Knechtschaft, oder, wie man es heute gern nennt, der Wille zur Gefolgschaft. (E. Toller. Brief aus dem Gefängnis: 1935. s. 205.)

この人物台頭はドイツデモクラシーが、また国会が自から勝ち取ったのではなく、講和の申入れのあと日用品の配給品の如く与えられたこと、従っ

てノドから上はデモクラシーであっても実体としてのドイツは民主主義を身につけていなかったということにもその原因の一つがあろう。それに生活に行き詰って動揺するインテリが革命の結論を持ち合わせなかったし、自からを解放する努力を怠った事情も考慮されてよいだろう。しかも共産党には教条主義が強く尾を引いていた。こうした状況についてトラーはつぎのように批判している。

Am unduldsamsten sind gewisses byzantische Intellektuelle, sie vergötzen den Proletarier, sie treiben einen förmlichen Kult mit ihm und lehren ihn die Verachtung der anderen Intellektuellen.

Oft, wenn ich mit Arbeitern spreche, merke ich, wie dünn der Firnis der Paradeidoktorin sitzt, darunter leben die Instinke, die die herrschende Gesellschaft im Alltag der Schule, der Familie, der vereine gezüchtet hat.

(E. Toller: „Eine Jugend in Deutschland“ sechzehntes Kapitel, Fünf Jahre)

トラーの鋭敏な感覚は本人がユダヤ人であったことと無関係とはいえないが、第一次大戦後のドイツの急速な左傾化と、それに乗じた人間が程なく国家主義に転じて全く恥じないという無節操に胸を焼かれ、またアイスナー暗殺の学生の姿を通して人間のあり方に軽侮と同時に人間懐疑の念を呼び起したことも考えられる。

イギリス、フランスに比べて遅れていたドイツは大陸の自由主義を受け入れる土壌は十分ではなかった。教師、学生は超国家主義に走るとか、ないしは象牙の塔の哲学者に属してくることになる。(1918—19年にかけての労働者の努力に対する右翼勢力は排他的封建的な学生団体の中で教育を受けた学生であり、1923年にはドイツ国防軍の中核となり1939年以降は指導者に通ずる道を持っていた)。この姿はトラーにとって人間不信ではないにしても懐疑を憶えるには十分であったのではないか。それは、このドラマにも読みとれる。その不信感覚はトラーが21歳で第一次大戦に参加し、戦場を駆け巡った体験により戦場の兵士と同一化した感概が反軍国主

義者に向あしめたこと、これがプロイセン軍国主義、個々の人間に対してはプロイセン的軍国主義感情所有者への反発となって現われたのだろう。これはトラーをはじめとして1918年11月、第一次大戦から復員した多くの芸術家の反戦活動、そして表現主義の中から起ったことでも頷けよう。

25歳にして「赤い王様」と呼ばれレーテ共和国の主班になったときのトラーは純であったというべきだろうが、政治政略の渦巻く機構の中に入り、これと虚々実々の駆け引きをするには経験不足で未熟であった。虚構感覚が日常性化した世界ではトラーの純粹性は通用しない。トラーの文学の限界も、そこに思い出されるだろう。これが劇的な人生を経験せざるを得ないコースをとることになった。

II

さて5幕からなる「どっこい、おいらは生きている！」Hoppla, wir leben! の主人公 K・トーマス Karl Thomas は長い氣狂い病院生活から出て世間の勝手が十分に納得できぬ人間である。自分のイデーは広野に孤りで浮遊している。第一次大戦後のドイツの状況変化を、出獄後の人間が理解できない。それは入獄前と同一状況の感覚で捉えたことによる。

このドラマに登場する二十数名の人間のうち混濁の戦後を実際にくぐり抜けたと思われる人物としてキルマン Killmann がいる。キルマンと銀行家との対話が展開する…… (s. 35—37)

Killmann: Ich bin heute wirklich außerstande……

Bankier: Dann treffen wir uns doch lieber in Ruhe……

[………]

Killmann: Man muß die Völker zu nehmen wissen……

銀行家とキルマンは手を結び合いじっこの間柄である。ついで貴族との会話にキルマンの上流社会指向が示される。

Killmann: Weil die Minister von Völkerfriede schwatzen……

[………]

Was brauchen wir Machiavell……Der gestande Men-

schenverstand.

さらに続けて言う。

…Ja, Herr Graf, man dürfte nur noch dementieren.
Verleumdungen von rechts : Sie besitzen eine meiner
Antworten. Ich kenne die Qualitäten der Männer
des alten Regimes. (s. 35ff)

この会話の交錯から推してキルマンは Otto Braun を指していると思われる。Braun は印刷工出身で労働運動に従い、社会民主党に所属（1913）。1919年にはヴァイマル国民議会議員で1920～21年プロイセン首相となった人物で、労働者出身の労働運動弾圧者である。またドイツの政治家で社会民主党に属した Karl Seveling もそうである。1920～24年にプロイセン内相、1923～30年ドイツ国内相として共産党弾圧に手腕を振った。この二人を複合体にすればドラマの人物もキルマン Killmann が浮かびあがる。

作中の人物ピッケル Pickel は頭脳労働者で警察と往来している。彼は事業家センスの持主として登場している。その目指す事業は鉄道である。産業発展と鉄道網の拡張は政府との結びつきが緊密であることを要求する。事業家にあっては鉄道による時間距離の短縮も事業意欲を燃やす要素となる。ピッケルはまず相手を持ち上げる。

Pickel: …Herr General, ich habe geglaubt, der Herr Minister
sei ein Ehrenmann gewesen… (s. 98)

さらに政府に喰い入るには内務官僚との密着が狙いどころである。この目的のためか、在郷軍人会名簿を呈示する。政府の味方となる人間のリストであるから相手が喜ぶのは見えすいている。ついで人間生活の快適への指向をくすぐってくる。

Pickel: Hier ist meine Mitgliedskarte

さらに一人言のように

…man führt zwei Tage auf der Eisenbahn…man freut
sich sein ganzes Leben darauf…mit der Eisenbahn,
wie mit dem Grundstück […] die Atmosphäre… (s. 90ff)

という。鉄道事業への関心は彼の誇りを高める。この誇りはドイツ的誇りを失わぬドイツ人それ自からを表明するもの、つまりドイツ人それ自からを表明するもの、いわばドイツ的市民の心境でもあろうか。実は、このドイツ市民ということが頑固な保守性を意味するものであることをクルト・トゥホルスキーは見破っているのを考えたい。「市民……このドイツ市民層というのは全くもって反民主的で、他国にはまずその比を見ないものであって、これがあらゆるみじめさの核心なのである。…犬のような忠実な目をもって上を見上げること、手荒く試してもらい、神々しい後見人の力強い手を感じるからこそ、かれらには喪心よりの欲求であった」(藤本訳「ぼくら否定派」展望S. 49. 11月号)

この〈みじめな〉ドイツ人の心が一朝にして消え去るものではなかった。戦争の試練もこの心的根拠を一挙にくつがえしていなかった。ところが気狂い病院 *Irrenhaus* に8年間も入れられていた主人公は、巷の騒擾を経験し、この人間変化に、在来の人間も変っているものという考えを持ったこともさることながら、しかも8年間の空白を埋めることなく、そう思い込んでいたのではなかったか。これが主人公の観念性となって露呈される。その観念性はマイナス面となって結果する。主人公 *Thomas* にはベルク *Eva Berg* と呼ぶ愛人がある。その女性は *Thomas* に語る。

…Ich bin ein lebendiger Mensch. Die Meinung, daß ein Revolutionär auf die tausend winziger Freuden des Lebens zu vernichten habe, ist absurd. Alle sollen teilnehmen, das wollen wir doch.

[………]

Diese Revolution war eine Episode, . Sie ging vorüber……

Die Partei brauchte mich, ich habe die Zähne zusammengebissen und…… (s. 51ff)

この言葉に主人公 *Thomas* の頭は混乱する。物質的享楽だけを考える人間が眼前にいるようにさえ覚える。ところが、この女性も人間関係は妙に割り切っている存在で、それもストイックな面とそうでないものを混在

して所有している心象にある。愛するが決して法的な共同生活に入らない。ドラマはこのような人間の結びつき、かかり合いを演じさせながら進行するが、この人間が型通りの言い合いを交わすだけ、という感じを覚える。いわば定型化された人間が描かれている。これはトラーの他の作品にも見受けられる。たとえば「大衆・人間」Masse・Menschでは官吏の夫と革命家である妻を登場させているが第3場で見張り女と妻、見張り連中の「大衆だ」「人間だ」といい合う姿、名もない連中の言葉でもすぐに大衆という言葉がとび出すのが多い。例をあげれば第3場の一

Nieder die Fabriken, nieder die Maschinen!

eine Wache: Die Masse gilt.

Die Frau; Der Mensch gilt.

Alle Wachen: Die Masse gilt.

vereinzelte rufe im Saal: Nieder die Fabriken, nieder die Maschinen! (Masse Mensch: (s. 81)

E'ne Gruppe von Landarbeitern: Wir wollen Erde!

Allen die Erde! (s. 82)

Der Namenlose: Sie sind die Masse!

Ich bin Masse! (s. 85)

[.....]

Masse ist Tat! (s. 86)

同ドラマの第7場にあっても愛、善、悪といった抽象的言葉がとびかう。

Der Mensch ist gut……so träumtest du

[.....]

Der Mensch ist böse von Anbeginn

[.....]

Mächtiger! Lustiger! Der irdische Rhythmus

ここにトラーの人間観がヒューマニズムの人間像を目指しているものの、これだけでは社会、個人の解釈が抽象的なものに堕してしまう危険性

を含んでいることに思い至る。生身の人間を善と悪に割り切る。その結果は味方と敵の単純な分類となる。だから人間の捉え方が非歴史的となり、人間の悪に対して結局は懷疑に陥る必然性を有して来る。幻想で対応するからである。人間的共感はあるとしても、共感に対する使命感、一体感に自己陶醉する破目に陥り易くなる。

Ⅲ

ドラマの主人公の幻想懷感は人間の悪に対する感覚稀薄にもつながる。実情計算に不十分なところが生じ虚構感覚になり易い。ドラマでは、急に娑婆に出た主人公の性格も、これに似た面がある。感覚の幻想性ということがそれで、これでは理論的に革命理論を一応身につけても、それは頭の中だけの観念性にすぎなくなる。本当のドロドロした人間、政略と企業活動の中で闘い生きる人間を捉える力が不足することになる。幻想と事実の混入、ドロ臭い人間の姿が掴み難くなる。主人公がいかに革命に向って突き進んでも大衆から遊離し易くなる。「表現主義は、個人的現実をも客観的現実をも軽蔑し、一方から他方へ通じる道としての精神を軽蔑した。だから破綻せざるを得なかったのだ、(「世界プロレタリア文学資料・資料42」ールドルフ・カイザー「表現主義の終焉」) という指摘は注目しなければならぬだろう。人間の深層は見送られ、個々の生活に眼が届かぬ状態では人は動かない、ということをはのめかしている。これはトラーの文学が強い道德観に裏打ちされた性格を持っていることにもつながる。シュテファン・グロースマンの「トラーにたいする裁判」にトラーの文学についての証言に立ったトーマス・マン、ビョルン・ビョルンソン、クール・ハウプトマン、マクス・ハルペ、マクス・マルターシュタイフが「トラーの文学が強烈な倫理性から発していることを断言している」(「ドイツ革命」191頁。平凡社) のである。だがこの倫理性と強烈さは左翼急進派インテリはおしなべて持っていたのだろう。それは彼らの憎悪するブルジョア教育によって彼らは教育され、こんどは、それを否定するが故に、そうした態度をとるだろう。にも拘わらずブルジョアを否定する当の人間が、その

ブルジョア教育・教養を身の中に巣作らせているという二面性も否定できずこれが逆に強烈さを発芽させたともいえよう。しかも、教育という形の生産手段はブルジョアから与えられたものであり、その点ではブルジョアと相通ずる面を持つという一見矛盾した存在でもあったのだ。（但しトラーは生活においてもピューリタンで、たとえばトラーに対する論証記録が9巻に上っており、その中でトラーの生活が調べられているのが判るが、トラーに対する非難さるべき生活上の悪徳はなかった一前掲書）

さてドラマは急進革命家トーマスをめぐって勢いのよい言葉のやりとり、その間に介在する計算高い人間、同志との人間交差が織りなされながら進む。そうして屋根裏部屋でラジオのスピーカーに耳傾ける人間、同じホテルの特別室で一人の貴族と並んでいるキルマンがいる。また小使いはインフレで貯金が目減りしてしまっていて困っている。この三人三態の人間模様は世の矛盾を背負った生きた人間でもある。それがそれぞれ別な人間として並んでいる。特別室からは「どっこい、おいらは生きている！」という叫びが聞えてくる。

Lautsprecher: Achtung! Achtung! Alle Radiostationen der Welt! Der neue Schlager „Hoppla, wir leben!“
(Man hört Jazzmusik)

(s. 82)

このスピーカーを聞くだけの存在でしかない男もいる。彼は目的も持たない。自己呪縛にかかり放心しているような姿でもあり、自己規定がなくなっている。八方塞りの人間でもある。スピーカーの声はさらに続く。

Achtung! Achtung! Newyork. Royal shell 104 Standard Oil 102
Achtung! Aufruhr in Indien……Aufruhr in China…… (s. 82)

このくだりでは世界の株式相場変動を伝えていると同時に植民地における解放運動を知らせている。資本主義のシンボルとでもいうべき株式市況は戦争中でも、また戦争が終っても、さらには革命の嵐が吹き始めていても、それをすべて材料として呑み込んで価格を形成している。戦争も平和

も株式変動に織り込まれるという計算づくの動きは、世の動きの冷観な結末を毎日々々提示している。

トーマスにとっては眼のくらむような眼前の動きである。自分自身にとっての時機好転のきざしはささない。そして反動政治家を亡き者にしようという心情に陥る。革命家がテロリストに変身するという心境の変化である。まずはキルマンを狙うこととし、拳銃を懐に入れる。組織で対抗すべき行為がテロ行為に移るという図式は革命の展望が開けず、人心が去った客観的状况の中の人間が陥った姿である。このときトーマスは革命家ではなくなっている。やり場のない憤りを他にぶっつける人間像がある。周囲は革命理念のない人間がいる。主人公は政治的理念を無くしてしまっている。もう指導者としての条件さえ放棄している。

一転して偶然にも、ある学生が現出して、キルマンを暗殺する。暗殺の理由は、キルマンがファシスト団体の活動を禁止しようとするからに他ならない。同じ暗殺でも理由を異にしたファシストによって、トーマスの目指す人物は死亡する。しかも暗殺容疑者としてトーマスが逮捕され、簡単に刑務所に送られる。トーマスにとっては世の中全部が狂っている。

トーマスと異なり暗転する闇のような社会の中でも、冷静な計算に生きるのは財界に身を置く人間である。ここには銀行家もいる。彼は卓上電話を使って相場の高下を知るのに懸命である。戦争は「買い」だった。それが終れば「売り」である。第一線で生死を賭した将兵に対し、ここでは生も死も勝利も敗北も、二つに一つの売りと買いの対象でしかない。戦争が終れば「売る」ということだ。擬制資本の乱高下が渦巻く。それをいかに裏をかいて利潤に向けるか、が問題である。

Börse? Alles verkaufen! (s. 108)

これが仕事である。ビジネスで割り切った戦争、革命—それは売買の対象として存在し、儲けが自己目的となって万事了承ということである。だから—

Normal……Normal…… (s. 108)

となる。

一方では革命を目指し一途に自己犠牲的な生活がある。他方では金儲けに狂奔する人間がいる。この両極の人間。しかも『ノーマルな人間』は、いつでも損をしない、損害を受けたくない、ただ自己利益の増殖に身を処する。彼にとっては思想は、まして革命を口にする人間は眼中にない。重要事は商品価格の動き、見通しであり、それが「正常」なのだ。この計算を正常視する人間にとっては自己犠牲を伴う人間は青二才にしか見えない。一方は俗物的な故に逆に实际的である。实际的な故に俗物的である。トーマスの頭はいよいよ混乱する。いわば罫にでもかかった感じなのである。

トーマスは革命の声が高揚したときでも、独占資本家、保守政治家、旧官僚も共和国機構内に温存されていたこと、その力を過少評価したのであった。去ったものはカイゼルだけであったことを忘却していたのだった。トーマスはいつしか自分の認識力に疑いを深めてくる。そして名状し難い空虚感。

Der Nebel zerriß Norriß. Vielleicht ist die Welt gar nicht verrückt : Vielleicht war alles nur ein wirrer Traum...oder gibt es heute zwischen Irrenhaus und Welt keine Grenze? Ja, Ja : wirklich...Die gleichen Menschen, die hier als Irrebewacht werden, galoppieren draußen als Normale... (s. 110)

ここに至ってトーマスは「大衆とは何ぞや」を再考する。これに割り込んだように Professor Lüdin は淡々と言う。

Die Masse, eine Herde von Schweinen. Die Polizei sollte sie rechtzeitig uns Irrenärzten übergeben, statt zuzusehen 「……」 Sie sind der Erzfeind jeder Civilisation! (s. 111f)

革命家の視る大衆は幻想である、ということである。それは革命家を夢想家としてしか把握していない。現世にあるのはただ混沌 Chaosであり、人間の狂気 Wahnsinn である。この世俗人間観の中で、夢想家が人間讃歌を、大勢で景気のよい歌詞を歌い上げても、それは子供の歌として響く

にすぎない。歌う必要もないというほどである。

Sprechen Sie nicht Komödie. (s. 114)

トーマスは完全に打ちのめされる。希望を失ったトーマスは獄中で縊死する。ところが自殺のあとテロの真犯人がファシスト学生と判る。真犯人はスイスで逮捕される。時遅くその時トーマスは死んでいる。それは僅か一分の時差が生んだ悲劇であった。

この人間の悲劇はトラー自身にも当てはまる。トラーは全人間を一つの「人間」の下に包括して解している。これは「ドイツの青春」**Eine Jugend in Deutschland** の「五年間」**Fünf Jahre** の中で書いている「正義，自由，人間性への世界の信仰，不安と飢餓のない世界への信仰」としてしているのにも覗える。この複雑な現象をする政治機構の実体にまで追及していない人間観，そのもどかしさを感じる。一個人の変革を呼びかけることによって社会を変革，解放しようと目論んだトラーの悲劇の誕生が垣間見られる。トラーは現実に関心を向けたものの，それだけで止まった，というほかない。トラーは「獄中からの手紙」でつぎのように綴っている。「人間はいつも救いなく，いつも十字架にかけられている。ぼくも，かつて社会主義による救済を信じたことがあった。多分それは「生の虚構」だったのか。社会主義，必然的な新しい経済機構，しかしそれだけでは充分ではないのだ！巨大工場。だが人間は？ 人間はどうなる？ ぼくは傷つき，惑乱する。ぼくは，この危機を克服しなければならぬ。それは〈弱音〉とも〈禁固の結果〉でもない」（「テッサへ」1920年9月1日—東邦出版社刊）。「この〈知識人〉が戦争中にどんな判断力を示したか，を考えてほしい」（「クルト・ヒラーへ」押収されち手紙—1923年前同）。これはトラーの生きた姿と亡命先のアメリカで貧苦にさいなまれて自殺するに至る行路を暗示している。

だが，さらに考えねばならぬことはドイツ的なもの，ドイツ的な惨めさをドイツ自体が抱え込んでいた，ということであろう。「1918年のドイツ共和国は非合理の時代のまっただ中にすえられた。それははじめから，

息をして生きてゆくのが困難だった。……ドイツ人は、国家が存続しさえすれば満足だったのである…」「反動と国家が人々の頭のなかで一つになったとき、ついに国粋社会主義が登場することが可能となった」(H・マン「歴史と文学―超国民的なものへの信条告白、共和国の不幸」晶文社刊)。いわばドイツ的なものが国家権力への恭順、市民的無気力であったということ、そして精神の認識性といった内面への傾斜に向ったということであり、この人間の中にあってはトラーの悲劇も不可避だった、という他ない。しかもトラー自からもドイツ革命とドイツ民衆のあり方については「ドイツの青春」につぎの通り指摘しているのでも判るように、疑念を懐いていたのである。にも拘わらず現実体験から革命を引き出すことができなかったのである。

Die deutsche Revolution fand ein unwissendes Volk, eine Führer schickt bürokratischer Biedermänner. Das Volk rief nach dem Sozialismus, doch nie in den vergangenen Jahren hatte es klare Vorstellungen vom Sozialismus gewonnen : (E, Toller: „Eine Jugend in Deutschland.“ zehntes Kapitel. Revolution. s. 111)

人間の善を信じ悪に対し徹底的に対応するものを欠いていたのである。

IV

作品はトーマスの敗北挫折によって終る。インテリであったトーマスは日常生活にも疲れ果てる。この点と関連してトラーがプロレタリア大衆を土壌とした人間を主人公に据えなかったところにも問題があろう。もとよりプロレタリア大衆は無謬ではない。だが弱きインテリを主人公にしたのは悲劇を孕んでいたといえるだろう。作品内の台詞は活気乏しく、常套語の多い作品と人間に終わっている。これで主人公には幻滅と徒労感が残る。1919～25年という期間はドイツにとっては幻覚の時期にすぎなかった、という歴史的事実がある。批評家的な不平家であって、政治的指導理念を欠いた人間では展開困難は予想されるところであった。それは理性の敗北でもあったのだ。これは同時にドイツそのものの説明でもあろう。「……つ

ねに封建的残存を至るところに残しながら、軍国的官僚的な国家社会形態をつくり上げて行った過程は、結局ドイツの文学に、遅しく充実したレアリズムや革命的現実批判や、健康な空想力の溢れるロマン主義などを開花させなかった根本の原因があると思う。……多くの真実の才能は不遇のうちに狂死したり挫折したりする（ヘルダーリン、クライスト、グラーペ、ビュヒナー等々実に多い）。わずかにフモールに逃れるものも多い。（ジャン・パウル、ラーベ、ケラー等）。大多数の地平をみたすものは「穏健な」常識的モラルや、生ぬるいセンチメンタリズム、アカデミックな「哲学」にみたされる凡庸作品である。」（道家忠道「ドイツの近代文学 創出の基礎」—「文学」昭和25年5月号）という、このドイツ的なものを背景として考えるとき、トラーの重い人生、ヒトラー政治を逃れアメリカで孤独を味い、絶望的に自殺した劇的な人生と、この「どっこい、おいらは生きている！」も理解できるのではないだろうか。

（テキストは Ernst Gesammelte Werke Carl Hanser Verlag 1978
によった）